HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	アジアにおける三島文学 ： 自決後40周年によせて(退職記念)
著者	テレングト，アイトル
引用	北海学園大学人文論集，45：67-85
発行日	2010-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

アジアにおける三島文学 ――
自決後 40 周年によせて

テレングト・アイトル

一，

今年は三島由紀夫自決四〇周年にあたる。彼の作品がその生前から人気があり，死後四十年間もロングセラーになっている。そして日本ではいうまでもなく，海外でも日本文学研究分野において最もホットに研究されてきた現代作家の一人になる。ただしその作家の誕生から自死まで，さらにその死後四〇年経った今日まで，相変わらず理解されていないところがあり，内外を問わず研究者と読者がその「謎」に戸惑い，その文学に魅了されつづけてきた。日本文化の土壌で生まれ，日本文学研究において未だに理解できない「謎」があるとは，一体なぜなのか。たしかに，三島由紀夫それ自身について，あるいはナマの三島由紀夫という人間それ自体について今まで膨大な評論・研究・伝記が蓄積されてきた。人間としての三島由紀夫についてのエピソードが次から次へと掘り出され，より身近な人間として把握されるようになりつつある。そして作品研究も大量に積み重ね，自決からいくたびにもわたって専門の研究誌において特集として取り上げられ，何年ごとに「三島由紀夫とは一体何であったか」といったような，決して誇張していない問いかけは何回も繰り返してきた。ただし，ほとんどの特集・企画・プロジェクトや作品研究は，一点張りして，人間あるいは作家としての三島由紀夫を解明するためか，理解するための研究である。したがって，三島文学について，依然として「謎」が存在している。本稿は，そういった人間としての三島由紀夫ではなく，むしろ三島文学それ自体とは何であったか，自決後四十周年を迎える際，改めてその文学につい

て問いかけたい。というのも，三島文学研究分野において，今までそれは決して重要な問いかけとして看做されてこなかったのである。いうまでもなく同世代の研究者たちにしては，三島のショッキングな自死から目をそらして，もっぱら文学に目を向けるのは難しかったであろう。死をもって生を嘲笑うかのように，三島のさまざまなメッセージの衝撃をないがしろにして客観的に直視しようとは無理難題である。しかし，その一方，三島は何よりも政治家ではなく，思想家でもなく，さらにまた社会活動家でもない。彼は何よりもまずは作家であり，文学者であった。したがって，彼の文学もしくは作品は，彼の作家として人間性あるいは作家性によって決定付けられたのではなく，作品そのものによって意味づけられてきたのである。つまり，三島由紀夫はその文学によって，あるいはその作品によって認知されるべく，その作品にこそ末永く評価される真価があり，作品によってこそ彼の全存在が明証されるのであろう。本稿は，そういった前提から出発して，日本・中国・台湾における研究傾向をふまえ，三島由紀夫とその文学の研究の可能性と限界を述べ，その文学の初期と晩期の作品を照合しながら，その文学の地域性と普遍性とは何か，その境界と可能性はどこにあるのかなどを考察したい。

二，

ここでまず，タイトルの「アジア」とは，三島文学を誕生した日本を指し，かつそれを受容し，しかも主として現在漢字を使用している中国・台湾という国家と地域のことを指す（もちろん，韓国をも視野に入れ，韓国の既存の三島文学研究動向を把握してその研究のあり方を考察することは不可能ではないが，しかし韓国語の第一次資料に触れずに，三島研究の現状を論じるのは，筆者としてはいささか抵抗があるので，それについて，関係の専門の研究者に委ねたい)。

まず，中国の受容についてであるが，中国は最初，一九七〇年代に翻訳から三島文学の受容に着手し，それが二〇〇〇年まで三〇年間，三島由紀

夫の主な文学作品がほとんど中国語に翻訳されている。しかも翻訳者はほとんど中国の日本文学研究者の第一人者たちによって担当され，翻訳の質も高い。批評と研究において，三島の著作と言動には，天皇賛美論，武士道の美化，思想的な右傾化，ナショナリズム的なパフォーマンスなどの要素があるといって，また日中間の政治・制度の相違によって，三島由紀夫とその文学を巡って，日中間には食い違いが顕著であり，しかも三島文学を批評して，研究するというより，むしろ価値観・倫理・道徳・イデオロギーなど，非文学的，あるいは文学にとって周辺の問題にこだわりすぎる傾向が強い。とりわけ，中国の文化大革命（1966-1976）の最中という状況において，一九七〇年十一月自決した三島由紀夫について，文革首脳部いわば毛澤東夫人江青の読む『参考消息･文芸専輯』（内部情報紙）にはすでに断裁されていたという。つまり「三島は『天皇制を復活し，武士道を再建し，再び侵略戦争を発動しよう』としたもので，三島の作品には『武士道にエロティシズムのブラック路線が貫いている』という文言」があった（葉 2006：http://）ほどである。事実，それに先立って，一九六七年三月一日付『東京新聞』において，三島由紀夫は川端康成，石川淳と安部公房と共同で中国に向けて「文化大革命に関する声明」を出しており，その声明文は，真正面から中国文化大革命に抗議したものであった。その抗議文では，中国文化大革命は「政治革命である。百家争鳴の時代から今日にいたる変遷の間に，時々刻々に変貌する政治権力の恣意によって学問芸術の自律性が犯されたことは，隣邦にあって文筆に携わる者として，座視するに忍びざるものがある。（中略）われわれは左右いづれのイデオロギー的立場をも超えて，ここに学問芸術の自由の圧殺に抗議し，中国の学問芸術が（その古典研究をも含めて）本来の自律性を恢復するためのあらゆる努力に対して，支持を表明する者である。（中略）あらゆる『文学報国』的思想，またはこれと異形同質なるいはゆる『政治と文学』理論，すなはち，学問芸術を終局的には政治権力の具とするが如き思想方法に一致して反対する」（三島全集〈36 巻〉2003：505）といい，毛沢東とその展開しつつある文化大革命にとって，それは最も反動的なものとなるが，三島由紀夫とは，い

わば文革の初期から中国の政治革命の敵となっており，それは最も許しがたい反革命的な作家で，早くからすでにマークされたはずであった。

しかし，とはいうものの，一方，「一，その本人(三島)は非常に複雑で，そのイデオロギーにおいて定義せねばならぬ多くの問題が残っており，その文学，芸術が非常に豊かで，かつまた非常に偏っている。二，彼は戦後日本文学史において無視できない地位にあり，研究に値するところがある。三，中国は長期的，特定の歴史に制限されたため，彼と彼の文学の知名度と，その多層的，立体的に研究にも負の影響を及ぼした。したがって，中国は彼の政治的思想とある作品に対して，偏った見解をもってきた。それらを再検討して，再認識する必要がある」(唐 1994：367) と，三島文学の研究の第一人者がその研究の必要性と重要性を語って，決して一概に批判してきたわけではない。事実，三島文学を，一種の「三島由紀夫現象」(葉 1994：1-15) と位置づけ，それを如何に理解し，解釈すべきか，課題となっており，中国の社会科学院を始め，少数の研究所・大学の研究者たちの間では，翻訳・批評・研究が途絶えなかったのである。しかもそれは常に一種の政治的な危険性をも伴う翻訳・研究の仕事であった。

一方，東方の儒教的な文学観の伝統においては，文学が政治と社会的な現実，または民衆のために語らねばならぬという美意識がある（テレングト 2009：75)。しかも，西洋の文学観のような，いわば「よき人は，この世にあっても死後においても，いかなる悪しき目に遭うこともない」(Plato *Apology*：D41）という命題への否定（Nussbaum 2003：318）的な価値観は，東洋の古代から現代まで，文学観において認められなかった歴史があり，そして現代に入ってからマルキシズムの文学観と融合して，中国においては社会的な現実と，政治的な要請に応じる傾向がさらに補強されたのである。したがって，三島由紀夫とその文学についても，同じく既存の善悪の価値観で価値判断を下してしまうわけであるが，それについては，かならずや文学辞典類か，文学史において一定の定義を下して，明記してきたのである。実際，それは平均してほぼ「病的な武士道」，「軍国主義の主張者」で，「変体的同性愛」，「右翼」，「政治思想上の間違った」(李 1989：

691-692）傾向があり，「反共・反中国」（陳 1989：100-101）的な作家だと位置づけられてきた。しかしながら，同時に，かならずや「怪異」，「怪奇」，「異常」といったような，価値判断的に片付けられる傾向が見られ，そこにはつねに理解不可能なことが伴われている。まさしくそういった理解不能なところがあることによってか，逆に，一九九〇年代に入ってから，中国の改革開放により，大江健三郎，川端康成，安部公房などの作品の翻訳が盛んになるにつれ，日本側の千葉宣一（元北海学園大学教授）によって日本代表編集顧問を担当して，三島文学の翻訳・研究も一気に新しい段階に入ったのである。つまり一九九四年から一九九五年にわたって中国作家出版社により『三島由紀夫文学系列（シリーズ 11 冊）』（一冊は伝記研究書）が刊行され，そして一九九九年から二〇〇〇年にかけて，さらに『三島由紀夫作品集』（翻訳シリーズ 10 冊）中国文聯出版社によって刊行されたのである。これは中国の日本文学の受容史において一人の作家にとって未曾有の冊数である。そして翻訳の改訳数と再版も多い。例えば単に『春の雪』は四種類の改訳版があり，『金閣寺』は三種類，『潮騒』と『愛の渇望』は二種類もある。

批評・研究において，一九九四年，中国社会科学院唐月梅教授による伝記研究『怪異鬼才 ── 三島由紀夫伝』（唐 1994）が上梓され，その翌々年，同じく中国社会科学院の葉渭渠教授を筆頭に，日本側から千葉宣一教授，アメリカ側からドナルド・キーン教授の共同編集による，初めての日中米の論文集『三島由紀夫研究』（葉 1996）が刊行される。そこには中国の国策が明確に記されなかったものの，恰も「三島由紀夫現象」とは何か，という問いかけに挑んだ，計画的な厖大な文化的なプロジェクトとも見える。

事実，三島由紀夫とその文学とは一体何かという問いかけには，葉渭渠教授は，中国三島研究の方向付けにも匹敵できる論文において次のように述べている。つまり，三島とその文学について，総合的，客観的に分析せねばならないと主張し，「三島由紀夫は特異な経歴によって，その文学と行動は人間性に満ちているが，同時は異常に残酷で，強烈な政治的イデオロギーがありながら，歴史の反復を嫌う。出来る限り歴史と美学を分けよう

としたが，しかしまた致し方なくそれを芸術化して，その矛盾と感情には，常識を超えた激しさとドラマ性がある」(葉1994：19)といい，単にイデオロギー的なアプローチによって裁かない姿勢を見せている。そして，三島の伝記研究においても，唐月梅教授は，日本の資料に基づいて，その作家と行動を矛盾・アンビバレンスとして，あるいは天才と狂人の間の人間として看做し，比較的その生涯を忠実に描出している。

しかし，一九九五年九月武漢における「三島由紀夫文学国際シンポジウム」が，政治的な理由で中止となったことがきっかけ（葉2006：http://）で，三島文学の受容は一時期停滞し，その間，日中関係の「政冷経熱」の時期にも相まって，三島文学への関心は冷めてきた。ただし，最近三，四年間には，散見的な研究がみられ，大学院教育訓練においても三島由紀夫を取り上げる修士論文が生み出されている。しかし基本的に九十年代半ばの研究の範囲を超えていないのが現状である。事実，中国は，三島由紀夫文学を理解と解釈するのには，適切な文学理論を持ち合わせておらず，ほとんど翻訳を通じて行なわれており，それによってか，逆に多くの研究者は，好奇心に近い視角から三島由紀夫とその文学に常に注目してきたといえる。読者の嗜好性や研究環境の難易度からみて，総じて言えば，三島文学は中国に受容されて，文学的に高く評価されてきたのは『潮騒』，『金閣寺』，『春の雪』などを中心とする作品である。

三，

中国大陸と比較して，台湾の事情は随分と違う。歴史的に一八九五年から一九四五年までの五〇年間，台湾は「大日本帝国」に組み込まれ，基礎言語教育までも日本語で行なわれた歴史がある。一九四五年，日本が引き上げた後，「戒厳令」（1949）や「日本語の教学厳禁」（1952年）などの政治的規制が厳しかったものの，日本文学の受容において，日本文学は外国文学というよりも，戦前の世代にとって，自分の一部分であったことと同然で，とりわけ三島文学受容において，三島自決以前の六〇年代から始まっ

ており，作品の翻訳も大陸より早くかつ訳版数も多い。三島の生前には，その作品『愛の渇き』，『金閣寺』と『春の雪』がすでに訳され，三島自決後には翻訳作品数が急増し，八〇年代になると最も盛んになり，近年まで単行本，合本，シリーズ，あるいは改訳版か再版が繰り返し刊行されてきた。例えば，改訳版の最も多いのは，『潮騒』で，五種類があり，『愛の渇き』，『金閣寺』，『仮面の告白』，『午後の曳航』がそれぞれ四種類もある。そして，『女神』には三種類があり，『春の雪』，『五人五哀』，『夏子の冒険』，『宴のあと』，『青の時代』，『獣の戯れ』と『憂国』には，それぞれ二種類の改訳版がある。そのほか『不道徳教育講座』や『肉体の学校』などのような大陸では訳されていない作品も刊行されおり，翻訳と出版数から見れば台湾は大陸を上回っている。

批評・研究において，台湾は大陸よりイデオロギー・政治に左右される度合が薄ったと言ってよい。それは三島自決の一九七〇年十一月二十五日から二十五日目，つまり十二月二〇日，陳孟鴻の論文「別の角度から三島を論じる」において，最も如実に示されている。陳孟鴻は，この論文で敢えて当時日本を含め，マスコミと文学批評界において，「軍国主義の台頭」，「武士道精神の復活」，「文人の政治参与」，「異常者」などの諸説は，いずれも皮相的だと指摘し，その文学と死は仏教の「虚妄（これは三島の作品において一貫したモチーフ）」によって理解できると論を立てる。そして，確かに三島の死は伝統，時代，社会，個人の生い立ちなどからは，ある程度まで説明できるが，しかし，「そもそも人間は理解し難い生き物で，本当の自我は表面的な行動にあるのではなく，その心の動きにあるのだ」と主張する。そして「もし，三島の四十五年の心の活動のいきさつを描出しようとすれば，三島自身ですら描出できかねる」といい，結局それは実際の死をもって答えるしかないと論を展開する。この小論の末尾で，もしも市ヶ谷自衛隊本部に突入したことがきっかけで，本当に自衛隊が拍手をもって歓迎し，熱烈に三島の主張を擁護して決起したならば，三島はどうすればよいか。自殺という結末を予定していた彼は「郵便に出した遺書を回収し，政治に参与して，自分の〈美学〉を実施するのであろうか」（陳 1971：1-18）

と仮設して鋭く詰問したのであるが，そういった反問したところに，陳孟鴻氏の三島の死に対する解釈には説得力が見られよう。このように台湾において，三島自決当時の日本のマスコミや批評界よりも冷静に見ているのであるが，そこからも台湾の三島文学受容のあり方の大まかな輪郭が見られよう。

台湾において八〇年代から九〇年代まで三島の翻訳は最も盛んな時期を迎えると共に批評や研究も多様に行われるようになる。それらの主な批評には政治的な色あいが薄いというのが特徴的である。それについていくつかの例を挙げてみると，作家論的なアプローチと作品論的な分析の両方を兼ねた方がより妥当だと主張する林水福氏は，『禁色』を真っ向から「男同性愛の世界」と定位し，作品の主人公の心理的な葛藤を中心に批評を踏まえた上で，歴史的，社会的というより，「『禁色』を純粋な小説と読み，三島によって描出された主人公の心理的な変化と苦しみ及び社会への回帰の遍歴を観察した方がいい」（林 1993）と主張する。李永熾氏は「『金閣寺』は告白的な美しい小説で」あって，それは「コンプレックスと美の間」，「内的と外的世界の融合と断絶」による「不安の結晶」であり，「精神的な永遠の美を求める三島由紀夫の行動学的な美学であって，……実際，三島の一九七〇年の自殺は，『金閣寺』のもう一つの新しいバージョンではないであろうか」と解説する（李 1989：）。張蓉菩氏は「人間？獣？運命？劇？」というタイトルの批評において『獣の戯れ』を「因果・善悪の応報に慣れた人達にとってどう定位するかが戸惑うだろう」と捉え，この小説では男女，夫婦・家庭関係を通じて「伝統的な道徳観への反撃と現代文明への軽蔑」が行われているという。氏は埴谷雄高と川端康成の三島に対する評語「混沌の時代とは無縁の偉大な作家」，「容易く理解できない人物」などを引用して，三島の難解さと劇的な面を強調し（張 2000：），簡単に断定するのを避けている。三島美学の視角からみる林水福は，「芥川龍之介や太宰治の自殺は彼等の『生』に対しての価値観をそれほど変えなかったが，三島由紀夫の自決は，それとは違って，人間の『生』の総体に対する強烈な反射があり，極めて文学的死の意味合いがある」と言及し，三島の美学を「雅」

に求め，その死を「自然」を超越するところの「生死の選択の形式のなか」に「本質的に人間を凝視しる『自由意志』にある」（林 2000：145；150）と解釈して，三島をより文学的，美学的に理解しようとしている。なかでもとくに言及すべきなのは，星光出版社一九九三〜一九九四年にわたって刊行された「日本経典名著シリーズ」十二冊の八冊の分量を占める三島由紀夫の作品シリーズである。このシリーズの以下の二点が注目に値する。まず『午後の曳航』の解説の冒頭で莫多は「三島由紀夫は偉大な文学創作の才気をもつ日本の作家であり，（……）日本の文壇はもちろん，世界文学においても永遠に歴史に残る作家である」（莫 1993：3）と賛美の言葉を惜しまず高く評価し，さらに該当シリーズの日本編集部は，「三島は『切腹自殺』をもって自死したのが様々な憶測をもたらしたが，ひょっとしたら偉大な文学創作者においては，その『自殺』それ自体が一種の創作なのである」（星 1993：8）と，三島の人物それ自体をもっぱら文学として捉えようとしている。また陳系美は『禁色』について「新たなる可能性 ── 三島文学の反日常性」において，戦前と戦争直後に憧れていた「世紀末の美」と「廃墟の美」が三島文学の太い主流になると説き，『禁色』を「男の同性愛の世界を描くことによって，社会の既存の道徳・秩序・多数決の原理及び俗悪な現実の美を風刺・攻撃した心理小説」と評して，われわれ人類の「安全を象徴している『習慣』と，その『習慣』とは違う思考をもつとき，今まで数々の可能性を喪失したわれわわれにこの小説が新たなるものを呈示してくれるのであろう」（陳 1993：3-6）と，ポストモダン的な視点で読んでいるのである。これらはいずれも三島への理解が，東方の伝統的，またはイデオロギー的な束縛から解かれており，三島の人間と文学の核心へ接近していることの現われであると言えよう。最近，大陸と台湾の交流が密接になり，大陸の三島作品翻訳シリーズが逆に台湾の「解説」で差し替えられて，再刊行されている（経典 2002）。それまで台湾には台湾の独自の翻訳の語彙・修辞・修飾方法（呂 1992：426）があったが，今やそれは大陸のそれへとシフトしようとしている現象の現われかもしれない。

総じて言えば，台湾の三島作品は訳版量が多く，常に大陸より一歩先ん

じて翻訳され，大陸がその後に次いで，翻訳か改訳版を出している傾向がある。そこには戦前五〇年間，日本統治時期の基礎教育の，歴史的な厚みが感じられる。台湾の評論・書評などをみても，そのバックグランドとトーンが日本とそれほど変わらず，とくに最近は，日本文壇・批評の趨勢とは，ほぼ同時的に進行しているといえ，大陸より常に柔軟な態度で受容している。ただし，台湾において，三島文学研究が散見的で，大陸のような纏まった専門的な研究書はまだ見られない。しかし教育訓練の一環として三島文学は頻繁に研究対象として取り上げられ，ふんだんに日本文献を利用し，そのなか優秀な修士論文も現われ，大陸より自由に研究している。三島文学に関していえば，台湾は大陸より日本文学受容において歴史の厚みがあり，かつ比較的自由で，日本文献を利用する頻度と密度が比較にならないほど高い（研究文献のデジタル化された現代においてこそ発生することであるが，三島文学研究に関して，大陸某大学大学院の修士論文が台湾の優秀な修士論文を模倣するというよりも，ほぼぱくって作成されている現象も見られるほどである）。

単に翻訳刊行事情から見れば，三島の海外受容において，台湾と大陸を合わせた三島の作品訳版量は明らかに欧米を遥かに凌ぎ，世界最大の受容地域だと言ってよい。この膨大な翻訳作品を背景に今後より多様かつ多元的な研究が導かれよう。

四，

日本における三島由紀夫の研究と解釈と理解には，一種のカオスともいえる現象が見られる。三島を「神」として崇めるものから，背徳として嫌疑するものまでの読者がおり，その文学を一種の特殊の愛か，死の象徴，もしくは日本文化の象徴と看做したり，あるいはそれを空虚と無の象徴だとみて，そこにはありとあらゆるものが混合して存在している。社会的には，三島由紀夫が政治的・イデオロギー的に寿がれ，国家安全や軍人の精神的な存在としても賞賛されるばかりか，個人的には天才から精神分裂症，

芸術的な狂気から男色まで，それもまた多様に解釈されている。そして，三島自決から今まで研究分野において主としていくたびにわたって問いかけてきたのは，「三島由紀夫とは何であったか」という，いわばそこには三島由紀夫その人間と，その文学を分けないようにして，疑問を投げかけてきたのである。とりわけ同世代の日本人にとって，三島は生き生きした一個の人間であり，そういった一人のナマの，かつ親しげな一日本人であったので，そのせいか，あるいはあまりにも現代人にとって身近な人であったせいか，研究者を含め，多くの日本の論客は，客観的に一定の距離をおいて，三島文学をみることを拒んでいる傾向が見られる。三島書誌伝記研究の第一人者松本徹は苦しげにも，一〇年前，読者にこのように告げている。

> 三島由紀夫が自決してから，すでに三〇年が過ぎた。しかし，いまだに彼の行動は謎に包まれたままだと言ってよかろう。もっとも三島自身にとって，その行動は，謎でもなんでもなく，思うところを果断に行なった結果に過ぎない。それにもかかわらず，われわれは，いまだに謎を見つづけている。いや，さらに謎を膨らませるのに精を出しているような気配である。なぜなのか？　もしかしたら，謎を見つづけることによって，三島がわれわれに突きつけている問題を直視するのを避けているのかもしれない。正面切って取り組むよりも，謎の領域へ押しやって置くほうが，われわれには好都合なのであろう。(松本 2000：5)

このような情況は三島自決してから四〇年経っても一向に変わっていない。

事実，三島由紀夫という作家と文学は，研究において二つの大きな傾向が見られる。その一つは，三島由紀夫とその文学資料・書誌の収集と整理と注釈においては，徹底されていることである。一九七三年から新潮社によって出版された『三島由紀夫文学全集』(36 巻) は三島由紀夫の基本資料

であったが，一九九九年山梨県山中湖村に「三島由紀夫文学館」が落成され，それを皮切りに，新資料の発見と補足が加えられ，改めて編集され，二〇〇六年『決定版三島由紀夫全集』(42巻＋1補巻＋1別巻)が出版された。また三島由紀夫生誕八〇年にあたる二〇〇五年に『三島由紀夫研究』という，証言・記憶の記録と資料発掘を目的にした専門雑誌が年二回で刊行をスタートした。このように，三島の文献書誌の収集，保存，整理においては，素晴らしい業績が積み重ねられてきたと同時に，とりわけ『三島由紀夫研究』は三島の人物にまつわる社会的，政治的，文化的，芸術的，またありとあらゆる人間関係にかかわる資料,エピソードなどが注目され，精力的に収集されている。いわば一個の作家として，その人間にかかわるすべてのもの・証言が収集されているが，当面，その最大の関心は，三島由紀夫という作家,あるいはその人物に興味を示している傾向がみられる。

もう一つは，このような三島由紀夫という人物に注目するあまりに，その文学についての研究は，いわば文学作品，文学それ自体というより，作家・人物に重点をおいて研究する傾向がある。こういった傾向は日本近・現代文学一般においても，同じことが言えるが，いわば，日本の歴史研究分野において厳密な意味で伝記研究が少なく，文学研究分野において厳密な作品研究が少ない。したがってその逆が多いわけである。つまり近・現代文学においても，文学研究はほとんど伝記的研究か，伝記研究に近い作家論か，あるいは作家か，作家の人間と人間性を解説するための作品論(最も多いのが一個の作家を解明するための作品論）である。三島由紀夫に関しても同じことである。三島文学作品の研究は，そのデビュー作から研究の傾向はそうであり，その作品研究がほとんど三島という作家か，作者の創作動機，創作経緯，作者の心理，生活，体験の真偽，作者の人間関係，作家の達成度など，を理解するか，解釈するための研究となり，作品研究は作者を理解する道具か方便となっている。そして作品研究の主とする目的，あるいは注目の中心は，作品にあるのではなく，作者・作家に置かれるのがしばしばである。まさにそういった傾向を気づき，それを乗り越えようと,『三島由紀夫研究』専門雑誌の発刊号において，松本徹･佐藤秀明･

井上隆史三人の編集者が揃って「刊行にあたって」には，自重して次のようにもいう。

> さらに視野をひろげ，多角的，柔軟に，恣意に陥ることなく，考究することが必要である。一定の立場に囚われず，いわゆる作家研究の枠からも自由に，各国の言語，文化の違いを深く認識したうえで，その障壁を越え，推し進めなくてはなるまい。(松本ほか 2005：1)

ここで三島文学研究において，「作家研究」という枠組から如何に自由になるかが，重要な課題となっており，それも今後，本格的な作品研究が期待されていることを物語っている。

しかし，以上ような二つの研究傾向は，まさに三島研究の基礎を固めるのには，この上もなく重要な役割を果たし，かつ三島文学の理解と解釈するのに，かけがえのない，素晴らしい基礎資料を構築してきたのは，いうまでもなくことであろう。それは三島を誕生させた国にとって，だれもが代替できない優位な点であり，特権でもある。

ところが，以上の作家研究の枠組のなかでも，生粋の日本文化の後継者三島と，そうではない三島という見方の対立も顕著に見られる。例えば「三島由紀夫は，私小説，風俗小説中心の従来の日本の文壇作家とは違って，むしろ西洋的な新しいタイプの文学者であり，……戦後の文学の主流的思潮とはどこか異質であった」(奥野 1993：12) と，また，「三島由紀夫は，それまでの日本文学にとって，ぜんぜん異質の文学者であった。……在来の小説を見なれた眼に，三島の小説がマガイモノと映ったのは当然であった」(本多 1992：99) というように，日本文学にとって，まったく異質者として扱う批評もある。

しかしながら，いずれにせよ，「作家研究の枠から自由に」なるのは，今後の課題となろう。つまり，以上のような，二つの傾向に偏らず，三島文学それ自体について，鑑賞し，研究し，その作品に注目して，三島の人物・伝記よりも，三島という作者・人物を越えたところ，その作品の文学性・

芸術性には，より多くの興味を示し，そういった立場から三島文学を解明しなければならないのが本道かもしれない。

もちろん，文学作品を理解し，鑑賞し，解釈するのには，その作者，その人物にまつわる背景と，その社会，文化，歴史など，またその周辺のすべてを理解せねばならない。それは非常に重要であり，その作品を理解するのには欠かせないことでもある。しかし，忘れてはならないのは，作家を研究し，評価するのには，最終的にその作家や作者，あるいは作家の人物ではなく，またはその作家性でもなく，さらに強いていえば，その歴史，文化，社会によって解釈されるものに限られるのではなく，何よりもその文学作品と，その作品の文学性，あるいは文学という自立・自律した独自の法則によるものであろう。一つの鉄則でもあるが，ある作家を評価するには，その人間性によるのではなく，その作品性によるものである。しかし,研究分野の細分化によってしばしばそれが逆転され,その人間性によってその作品が評価されるようになることも見られなくもない。もちろん，文学の解釈と，文学を見る立場は，地域・国家などによって，また研究者によってそれぞれ違ってくるが，しかし文学においては，歴史・文化・社会を超えた何らかの法則は確信をもって言える文学理論がないとはいうものの，作家たちが言語と人間，文学と人間との間に葛藤して，創作してきた文学には，共通する普遍的な法則がないと主張するのも，あまりにも短絡し過ぎる見解であろう。ところが，三島文学ほど言語と人間，文学と人間との関係において既存の価値観を転覆するものは少なく，また彼の作品ほど歴史・文化・社会を超えたところに絶え間なく文学を主張したものは，またもや少なかろう。しかし残念ながら，もっぱら，三島作品に注目して，その作品の文学性，芸術性について解明しようとする研究は，作家を中心とする研究に比べれば，未だに少ない方である。それは日本の国内にしては，その傾向が最も顕著である。

五，

以下，自分の三島文学研究について踏まえ，それに関連して，三島文学の今後の展開と問題点について触れたい。わたしはもっぱら文学理論を用いて，三島の初期のテクストを分析し，三島文学の根底にある法則・原型を解明しようと努めたもの（テレングト 2002）である。つまり，三島の初期作品「酸模」，「座禅物語」，「鈴鹿鈔」，「暁鐘聖歌」，「館」，「彩絵硝子」，「花ざかりの森」，『仮面の告白』という八編小説を分析し，そこで解明したものは，いわば，三島文学には，「**夢想**」，「**男**」，「**死**」，「**刑務所（社会）**」という四つのルート・メタファーが存在するということである。つまり，その四つのルート・メタファーが非明示的，かつ隠された意味で表示され，それらが物語の源泉，あるいは触媒として働き，数多くの部分的な隠喩を喚起し，物語において生きた隠喩（living metaphor; metaphor vive）というダイナミックなネットワークを組織していることを解明した。その膨大な，錯綜した，複雑なメタファーのネットワークは，三島のどの作品においても形式的に整然としており，それが初期十三歳の作品からすでに完璧に完成されていた。そして読者はだれもがそのメタファーの迷宮に入れば，迷い込み，その絢爛さと錯綜ぶり，様々なパラドックス，アンチノミー，パロディ，諷刺，逆転，倒錯，入れ子構造，過剰な遊戯，豪華かつ過剰な装飾などを楽しむか，あるいはそれに振り回される。その作品において，冴えたときの三島は，まるで手品師のように，物語を自由自在に操り，読者の読みを察知したばかりか，研究者，評論家の手口までも予知して，用意周到にストーリーを紡ぎ出すのである。

具体的に言えば，最初の小説「酸模」には，**「病的な，憧憬」によってみた夢想の世界**があり，その夢想する物語の世界には，必ずや憧憬される「**男**」が出現し，そして物語の帰結には，また必ずや**死か，終焉を意味する「墓」**が出現するのである。そしてこの夢想した世界に対して，否定的・対立的な存在となるのが**「刑務所」か，社会と喩えられた現実社会**である。そして「酸模」において夢想，男，死の世界は，刑務所，社会とは対峙し，「座

禅物語」,「鈴鹿鈔」,「暁鐘聖歌」,「館」,「彩絵硝子」において部分的に実現されるが，しかし,「花盛りの森」,『仮面の告白』になってくると，その対立の度合いが初期より激しくなり，両小説において既成の恋愛観・人生観・戦争観・死生観などのような美意識・価値観・イデオロギー・宗教ないし人間存在自体までも転倒され，はぐらかされ，ずらされ，さらには戯れられるのである。この構造がさらにパフォーマンス（演技）によって拍車をかけられ，この四つのルートメタファーを源泉として，延々と物語言説が産出されていくのである。

したがって，例えば三島文学のなかの重要なテーマである「死」についてであるが，今まで三島文学を研究するのには，最後の作品『豊饒の海』が最も重要視され,『豊饒の海』こそ三島文学を理解する鍵であるように論じられてきた。あるいはまた『豊饒の海』に現われてくる仏教の「唯識論」と神道的霊魂論が，最重要なテーマとして看做されてきたのである。たしかに，この作品は三島が死の直前に，予定通りに書き終え，彼自身もそれらを重要な最後の作品だと示していた。また小説について『豊饒の海』において全部書きつくしたと仄めかし，それ以上は書くものはないと読者に示唆してきた。そして，特に三島自決以降，多くの研究者，読者は，三島という作家，あるいはその文学のすべてが，全部この最後の四部作にあるのだと信じて，その四部作の中核になる「唯識論」と神道的霊魂論を取り組んで三島文学を解釈してきたのである。しかし，実際，時間の順序で，三島の最初の十三歳時の作品には，すでに「死」が宿命の如く，帰結として表出されており，若く二〇歳で死ぬという兆候は「花盛りの森」においてすでに現われ，十一月二五日に自殺する決意は,『仮面の告白』の執筆前に，すでに宣言済み（坂本 1979：224-225）であった。その「死」は，十三歳時の作品からすでに夢見て，憧れ，その後の諸作品において企み，計画し，いつそれが実施されるか，あるいは予定的に調和するのかが単なる時間の問題であった。言い換えれば，仏教の輪廻転生という人生の価値観は二〇歳頃に気が付いて勉強したものであり,「唯識論」のアーラヤ識も，三島が後で読んで吸収した不完全な知識である。「一霊四魂」の『霊学筌蹄』

（友清 1921：27-28）も，また二〇歳で夭折という理想のもととなった『ドルジェル伯の舞踏会』も，死を憧れて，長年ののちに仕入れた知見である。換言すれば,「死」という三島の諸主人公にとっての憧れてやまない世界は，幼少時代にはすでに情動・願望・憧憬・意志として存在しており，そして，のちに徐々にではあるが，少しずつ後から意味をつけ，外から習得し，吸収して，意味づけて，作品として豊かになったことである。その死は，三島文学の始原から，一種の原型として存在し，それがその後のすべての作品の死の触媒となり，後の諸々の作品の様々な死を生成し，予兆し，そして予定調和的に展開し，結末へ向かったのである。

したがって，確かに,「死」は三島文学の中核をなし，あるいは三島文学の全体を理解するのに重要な意味があるが，しかし，その「死」において後からつけられた仏教的な輪廻転生の意味を,あるいはその最後の作品『豊饒の海』における三島の文学の「死」の動機，原因を求めようとすれば，本末転倒になるのであろう。もちろん,もしその死の意味が輪廻転生やアーラヤ識によって，作品がいかにより豊かになったか，そのプロセスを検証するならば，溯及して，その最後の作品から初期の作品に遡って死の在り方や,死への憧れがいかに豊かになっていったかを検証してもよかろうが，しかし，さもなければ,「死」の動機，原因を最後の作品から検証するのは，方法論的に間違っているのであろう。したがって本多繁邦によって観察された清顕，薫，ジン・ジャンと透の転生の設定が，もし，真の作品における輪廻転生の世界観，人生観の思想を築いたとすれば，それこそまさしくフォルマリズムの主張する芸術観，いわば形式と内容を逆転させたこと（Eagleton 1983：3）の見事な成功の例と看做されよう。もしそうだとすれば，本多繁邦の最大の関心事，転生の証拠となる「黒子」の有無は，転生の真の証拠ではなく，何よりもそれは文学の技法で，文学の最大の証拠となるメタフォーである。『豊饒の海』の輪廻転生は，まさにそのメタフォーによって転生が証明されており,「黒子」というメタファーによって転生が構成され，成立されているのである。したがってもし，われわれはその「黒子」を削除すれば，小説『豊饒の海』が崩壊するのは，誰にも明らかであ

ろう。もちろん，『豊饒の海』は，もし仏教の「三十六相」（高楠 1989：108-9）をパロディ化して，あるいはチベットダライ・ラマの転生のような福相の慣わしをパロディ化して，はぐらかした物語として読むのだとすれば，その作品はパロディ文学として読むべき，それもまた読みを面白くさせ，豊かにすることにもなる違いない。

したがって，『豊饒の海』の作品研究において，今後，むしろ輪廻転生などが小説に挿入され，読者に呈示したのが，どれだけの文学的な効果，いわば難解を生み出し，文体を遅延させ，読者を苛立たせ，読者を文体に注目させるように仕掛けたのか，という効果を検証すべきであろう。事実，『豊饒の海』に「一魂四霊」を下敷きに，「輪廻転生」を挿入し，難解さによって読者・評論者たちの注目を引くのには，すでに十分に成功したといえる。しかし，そこに何よりもまず問うべきなのは，非文学的な著作から形式を借用してきたのが，文学にはどれだけ効果的であったかを検証すべきで，あるいは黒子のようなメタファーがどれだけ物語に役立てたかを検証すべきであろう。もしくは，逆に高度な修行をこなした，最終段階の修行者が ── あるいは解読すべき唯識論が『豊饒の海』の凡人である本多繁邦によって ── いかにパロディ化されたかを読むことも一つの必要とされる作業であろうかと考えられよう。

かくして，三島文学は，いつの間にか読者をすでに文学と仏教との関係へと導くこととともなるのであるが，しかし，一般的にいえば，西田哲学における仏教と，三島文学における仏教とは，まったく違う意味をもつということは，われわれはまず理解すべきであろう。そして，何よりもわれわれは三島文学からより多く教わるのは，その独自の構造的，文体的な特徴であり，その物語言説において高度な形式化・技巧化と，物語内容におけるルート・メタファーによって集約化・生成化・組織化されたことであり，そして，三島という天才がいかに小説の技法によってわれわれのもっているであろう世界観，諸価値観ないし文学観を逆転させ，倒錯させ，かつ読者をひきつけてやまない「魔術」のような物語の遊戯を駆使してきたのかを理解することであろう。

アジアにおいて，今後「作家研究の枠からも自由」になることが期待され，「三島由紀夫とは何であったか」ではなく，「三島の文学性，芸術性とは何であったか」，あるいは「三島文学とは何であったか」が問われる時代がきたかもしれない（完）。

引用文献

経典文学系列 2002『三島由紀夫文集』（１～６）Ecus Publisher 木馬文化事業有限公司（台湾・台北）。

星光出版社日文編集部「三島由紀夫について」1993『午後の曳航』（台湾・台北）。

陳孟鴻 1971『金閣寺』志文出版社（台湾・台北）。

陳元凱編 1989『外国文学辞典』江西教育出版社（中国・南昌）。

陳系美「新たなる可能性 ── 三島文学の反日常性」1993『禁色』星光出版社（台湾・台北）。

莫多「解説」，1993『午後の曳航』星光出版社（台湾・台北）。

李永熾「解説」，1989『金閣寺』久大文化出版社（台湾・台北）。

林水福「解説」，1993『禁色』万象出版社（台湾・台北）。

林水福「『金閣寺』，『憂国』からみる三島由紀夫の暴力的美学」，2000『聯合文学』（特別専題：異色文学）（台湾・台北）。

唐月梅 1994『怪異鬼才 ── 三島由紀夫伝』作家出版社（中国・北京）。

李徳純「三島由紀夫」，1989　張英倫ほか編『外国名作家大事典』漓江出版社（中国・桂林）。

呂元明 1992『日本文学論釈 ── 日中比較文学を兼ねて』東北師範大学出版社（中国・長春）。

葉渭渠 1994『三島由紀夫文学系列』作家出版社（中国・北京）。

葉渭渠 1996『三島由紀夫研究』開明出版社（中国・北京）。

葉渭渠 1999-2000『三島由紀夫作品集』中国文聯出版社（中国・北京）。

葉 渭 渠 2006，http://book.kantsuu.com/200601/20060113081700_30610_2.shtml

奥田健男 1993『三島由紀夫伝説』新潮社（日本・東京）。

坂本一亀 1971「『仮面の告白』のころ」，『文芸』（三島由紀夫特集・1971 年 2 月号）（日本・東京）。

高楠順次郎ほか編 1989『大正新修大蔵経』大正新修大蔵経刊行会（二十四巻）。

テレングト・アイトル 2002『三島文学の原型 ── 始原・根茎隠喩・構造 ──』日本図書センター（日本・東京)。

テレングト・アイトル 2009。「概念としての文学 ── 起源における東西詩学の伝統の相違をめぐって ──」『新人文学』第 6 巻，北海学園大学大学院文学研究科。

友清歓真 1921『霊学筌蹄』天行居（日本国立国会図書館)。

本多秋五 1992『物語 ── 戦後文学史』（II）岩波書店（日本・東京)。

松本徹 2000『三島由紀夫の最後』文芸春秋（日本・東京)。

松本徹ほか編 2005『三島由紀夫研究』(1)鼎書房（日本・東京)。

Martha C. Nussbaum, “Philosophy and literature”, Sedley David (Ed) 2003. *The Cambridge Companion to Greek and Roman Philosophy*. CUP.

Terry Eagleton 1983. *Literary Theory: An Introduction* [UK. Blackwell] US. University of Minnesota Press. 2008.